

=== T A C S 情報 第5号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和7年6月24日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、17.7℃（対平年差+0.2℃）と平年並であった。

6月上旬の平均気温は、20.6℃（同+0.3℃）と平年並であった。

6月中旬の平均気温は、24.1℃（同+2.8℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、122.0mm（対平年比99%）と平年並であった。

6月上旬の降水量は、28.5mm（同135%）と平年に比べ多かった。

6月中旬の降水量は、40.5mm（同78%）と平年並であった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比100%）と平年並であった。

6月上旬の平均全天日射量は、17.5MJ/m²/日（同89%）と平年に比べ少なかった。

6月中旬の平均全天日射量は、18.3MJ/m²/日（同107%）と平年に比べ多かった。

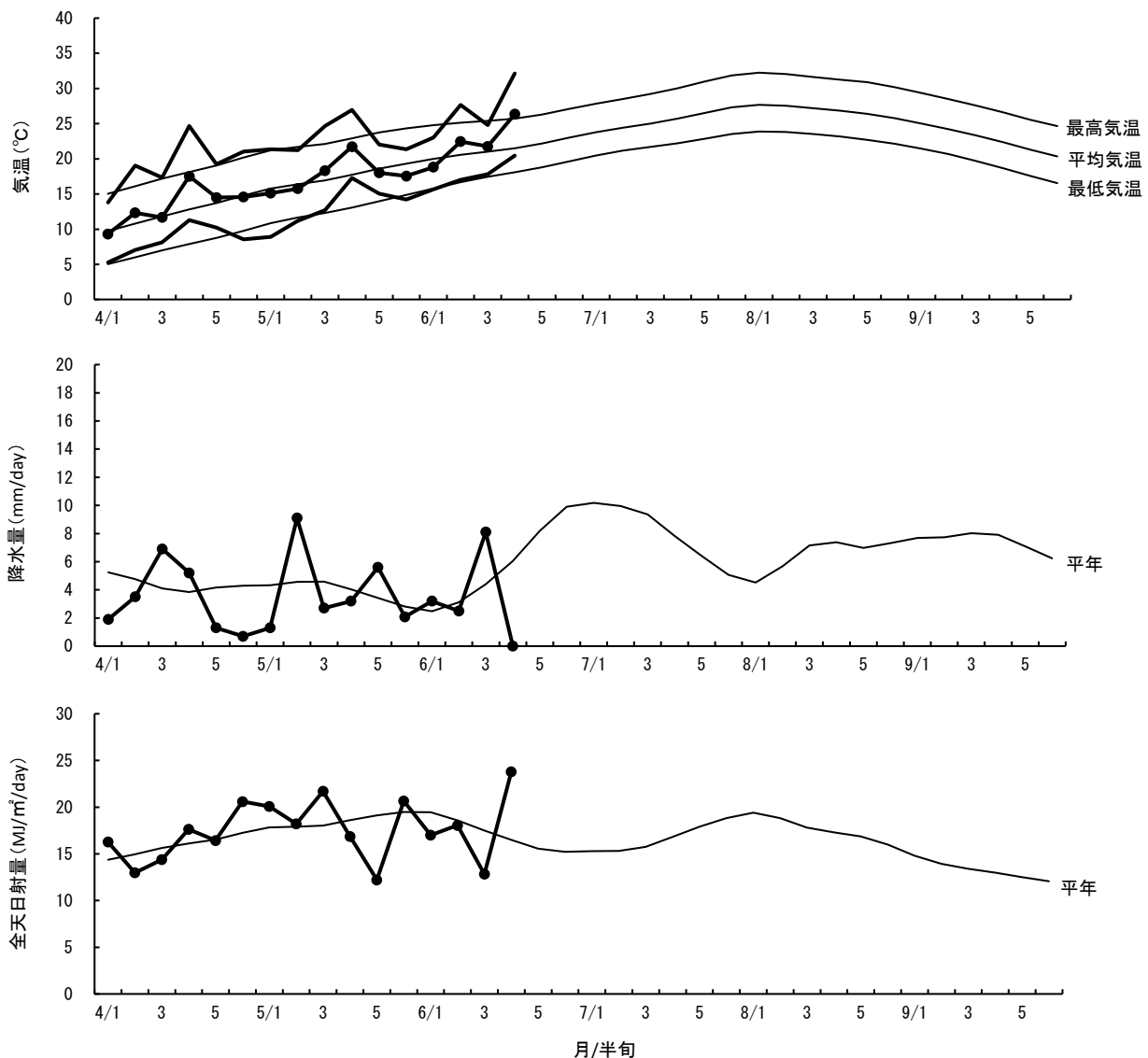


図1 令和7年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（１）てんたかく

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉齢は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ１日早い６月２３日頃と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ１日早い７月１４日頃と見込まれる。

表１ 「てんたかく」の生育状況（６月２４日 生育観測ほ）

年次	田植日	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R 7	4月30日	56.7	31.3	643	11.2	4.3	41.6	(6月23日)	(7月14日)
R 6	5月2日	56.4	32.5	694	11.5	4.4	41.8	6月25日	7月16日
平年	5月3日	53.7	30.7	662	11.1	4.4	40.9	[6月24日]	[7月15日]
前年比・差	-2	100	96	93	-0.3	-0.1	-0.2	(-2)	(-2)
平年比・差	-3	105	102	97	0.1	-0.1	0.7	(-1)	(-1)

注１）平年：H27～R6の平均、ただし、幼穂形成期及び出穂期の平年値[]は、R2～6年の平均

注２）R7の幼穂形成期及び出穂期は予測値

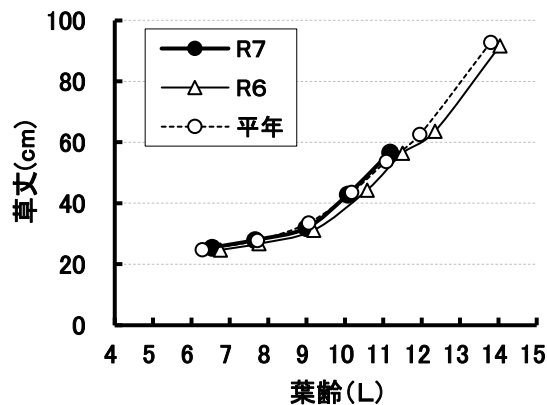


図２ 草丈の推移（生観てんたかく）

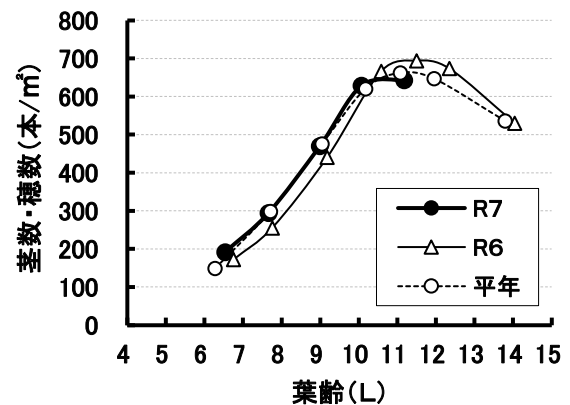


図３ 茎数の推移（生観てんたかく）

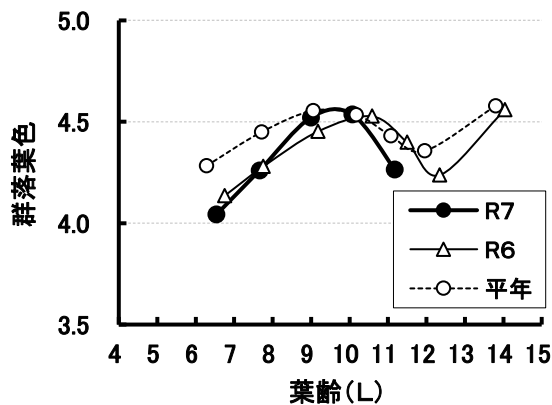


図４ 葉色の推移（生観てんたかく）

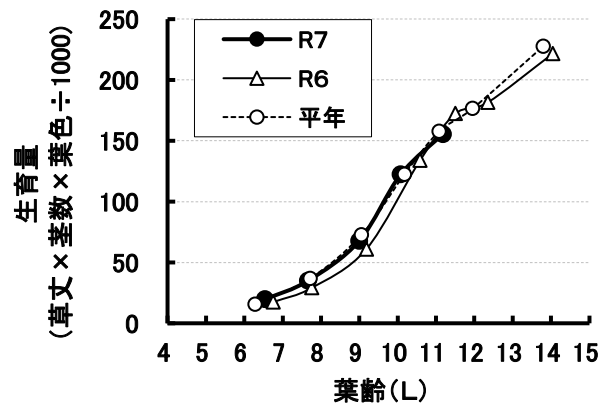


図５ 生育量の推移（生観てんたかく）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈は長く、茎数は並、葉色はやや淡く、葉齢は0.3葉進んでいる。
葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並となっている。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月24日 生育観測ほ）

年次	田植日	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD
R7	5月13日	50.3	25.2	542	10.3	4.2	38.6
R6	5月14日	46.7	25.2	537	10.2	4.2	38.7
平年	5月14日	45.8	24.5	533	10.0	4.3	39.3
前年比・差	-1	108	100	101	0.1	0.0	-0.1
平年比・差	-1	110	103	102	0.3	-0.1	-0.7

注) 平年 : H27～R6の平均

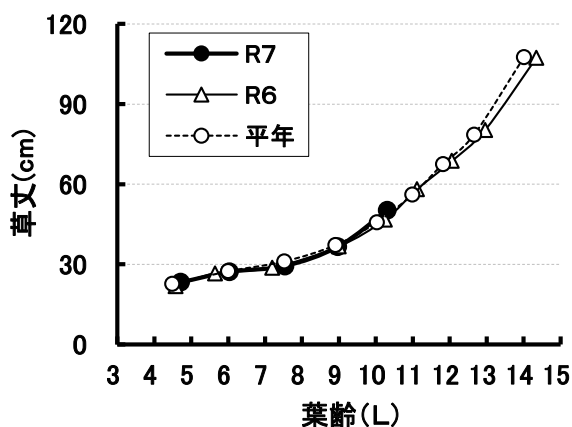


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

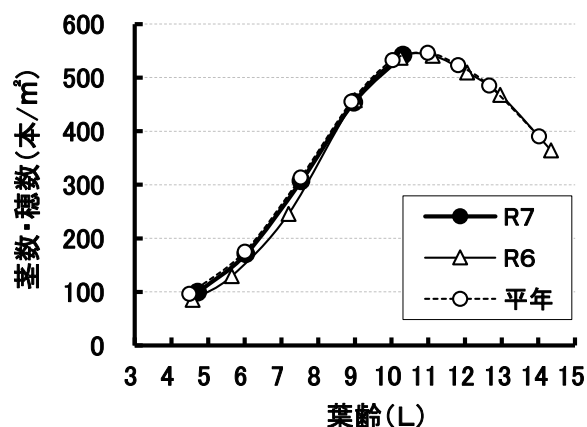


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

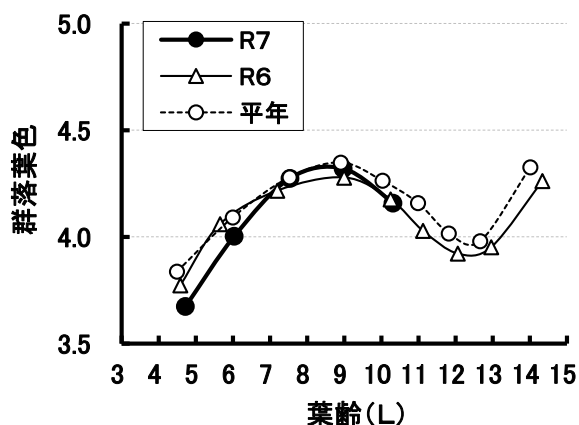


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

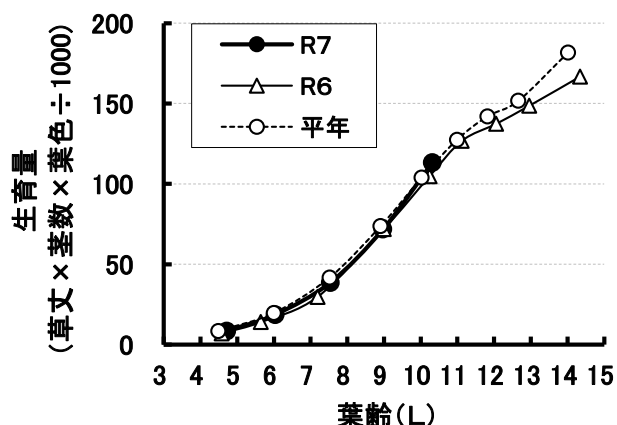


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈、茎数及び葉色は並、葉齢は0.5葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉色は並となっている。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月24日 生育観測ほ）

年次	田植日	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD
R7	5月12日	39.4	32.3	627	10.6	4.3	40.6
R6	5月8日	42.6	37.5	710	11.6	4.3	39.9
平年	5月8日	39.9	34.8	662	11.1	4.3	39.1
前年比・差	4	92	86	88	-1.0	0.0	0.7
平年比・差	4	99	93	95	-0.5	0.0	1.5

注) 平年 : H27～R6の平均

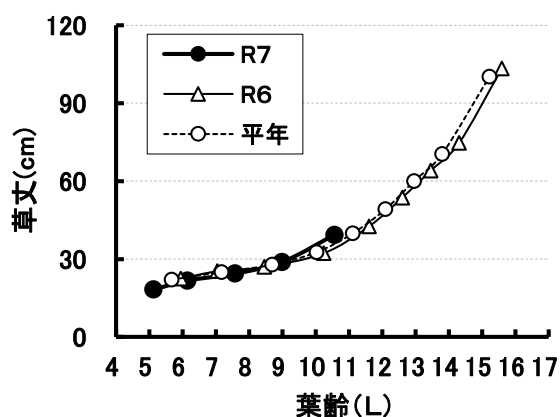


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

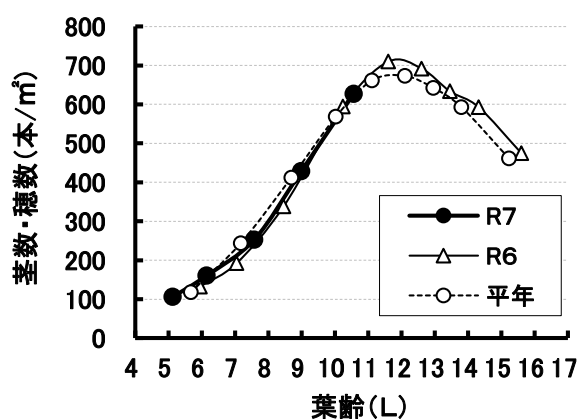


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

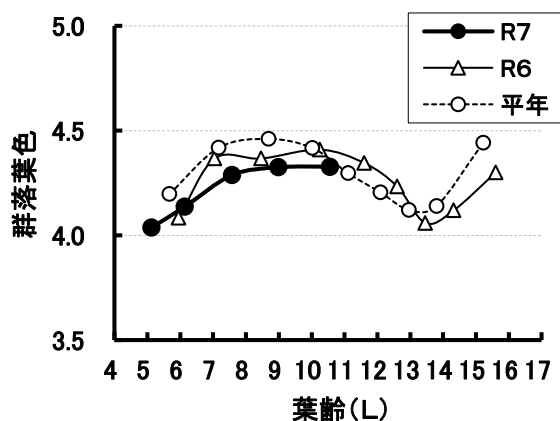


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

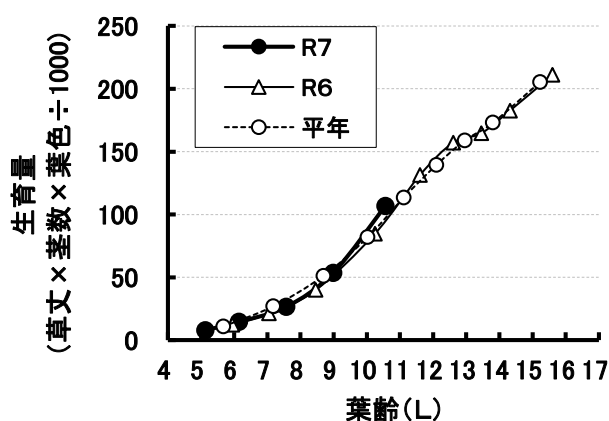


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

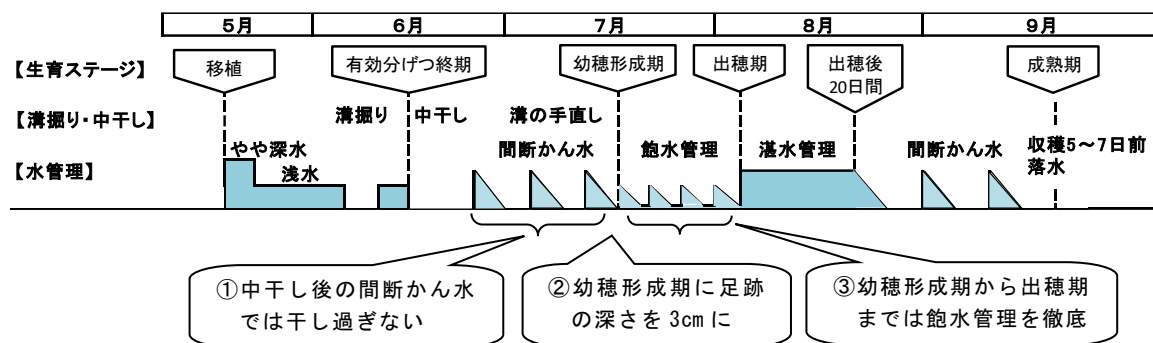
3 当面の技術対策

- ・今後、気温がかなり高くなると予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、干し過ぎの水管理にならないように注意する。
- ・中干し後の間断かん水では、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、稲体活力を維持するため飽水管理を徹底する。
- ・斑点米カメムシ類の発生量が多くなっていることから、畦畔等の草刈りを確実に
行う（一斉草刈り日：6月28日～6月29日）。

（1）共通管理

- ・現在、いずれの品種も葉色が平年並～やや淡く推移している。また、今後気温がかなり高くなると予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、干し過ぎの水管理にならないように注意する。
- ・中干し後は間断かん水を行い、幼穂形成期までに足跡深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、稲体の活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底する。

＜今後の水管理のイメージ＞



（2）「てんたかく」の管理

- ・肥効調節型基肥栽培では、過剰籾数や倒伏を防ぐため、追肥は原則施用しない。ただし、現在の葉色が 4.0（砂壤土 4.2）より淡い場合は、速やかに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行う。
- ・分施肥系では、穂肥は表 4 を目安に土壌区分や生育量に応じて施用する。

表 4 「てんたかく」の土壌区分別穂肥窒素施用量の目安 (kg/10a)

土壌区分	1 回目 施用時期	2 回目 施用時期
	幼形期	幼形期の10日後
沖積 埴壤土	1.5	1.5
壤土	1.5	1.8
砂壤土	1.5～2.0	2.0
洪積 埴壤土～壤土	1.5	1.8

注) 以下の条件では 1 回目の穂肥を施用しない。
 埴土～埴壤土：幼穂形成期の葉色 4.3 以上かつ茎数 650 本/㎡以上
 砂壤土：幼穂形成期の葉色 4.5 以上かつ茎数 700 本/㎡以上

（3）「コシヒカリ」の管理

- ・安易な追肥は、過剰籾数や倒伏を招くので原則、施用しない。
- ・作付前にケイ酸質資材や加里資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を施用し、稲体の充実を図る。

(4) 「てんこもり」の管理

- ・幼穂形成期前に葉色が 4.0 (砂壤土 4.2) より淡い場合は、速やかに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行う。

(5) 病害虫防除の徹底

①斑点米カメムシ類

- ・現在、畦畔・雑草地及び本田における斑点米カメムシ類がかなり多くなっている（6月20日農業研究所調査）。
- ・今後の斑点米カメムシ類の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように草刈り等による畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。
- ・本田内のノビエやホタルイは斑点米カメムシ類の繁殖源となるため、水田内雑草の発生状況に注意し適切な除草対策を行う。
- ・麦あとは場はカメムシ類の繁殖好適地となるため、雑草が繁茂しないように管理するとともに、積極的に園芸作物や緑肥等を栽培する。

草刈り運動期間：6月27日（金）～7月6日（日）
一斉草刈り日：6月28日（土）～6月29日（日）

②ニカメイチュウ

- ・要防除水準（防除時6月中下旬のさや枯最盛期被害茎率：3％）に基づき防除要否を判定し、適期に防除する。
- ・前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

③いもち病（葉いもちの初発確認日：前年7/10、平年7/10）

- ・現在、県内でいもち病の発生は確認されていないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



④紋枯病（紋枯病の初発確認日：前年7/5、平年6/26）

- ・前年多発したほ場などでは、出穂3～4週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
てんたかく	5 %	出穂 14 日前頃
コシヒカリ・富富富	15%	出穂 10 日前頃
てんこもり	15%※	出穂 7 日前頃

※てんこもりの要防除水準は暫定値

⑤白葉枯病

- ・常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤等を散布する。
- ・ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

⑥稲こうじ病

- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

⑦着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈は長く、茎数はやや多く、葉色は並、葉齢は0.2葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉色は並となっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月24日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD
R7	5月17日	42.9	26.2	571	9.9	4.3	42.3
R6	5月17日	42.0	27.2	593	9.9	4.5	42.3
近年	5月15日	38.9	25.2	543	9.7	4.4	41.4
前年比・差	0	102	96	96	0.0	-0.2	0.0
近年比・差	2	110	104	105	0.2	-0.1	0.9

注1) R7：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・プラ削減 対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R6平均

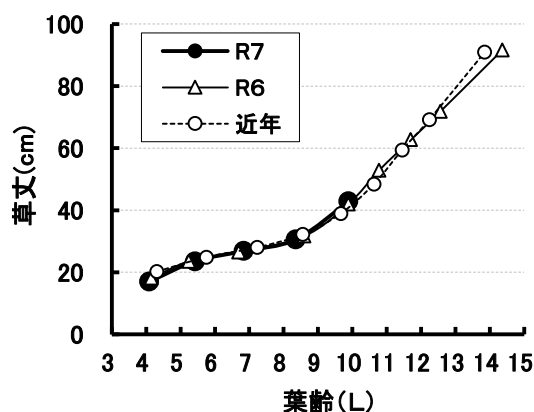


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

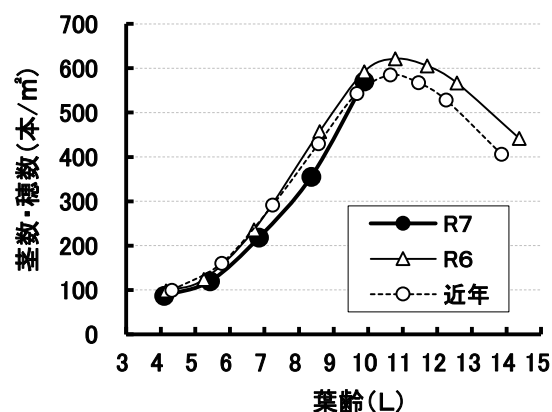


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

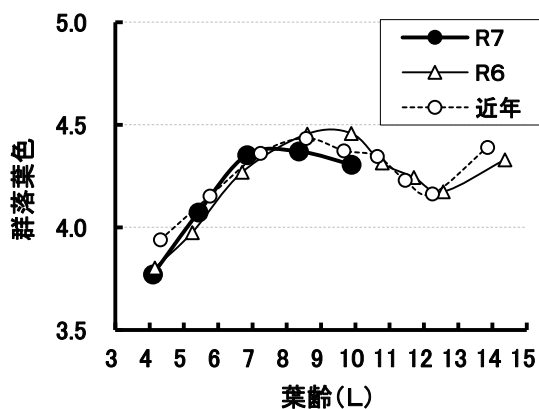


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

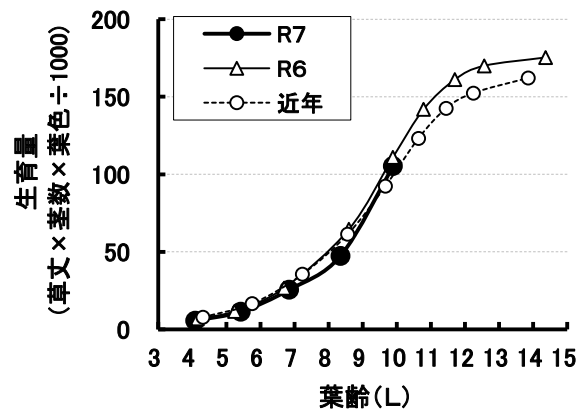


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

- ・今後、気温がかなり高くなると予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後の間断かん水では干し過ぎの水管理にならないように注意する。

(1) 水管理

- ・茎数が急激に増加しており、今後葉色が淡くなることが懸念される。また、今後気温がかなり高くなると予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、「富富富」慣行よりも落水期間の短い間断かん水（「コシヒカリ」と同様の水管理）を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する。
- ・ただし、葉色が濃い場合（群落葉色 4.5 以上）は「富富富」慣行の水管理（落水期間が長めの間断かん水）を行う。

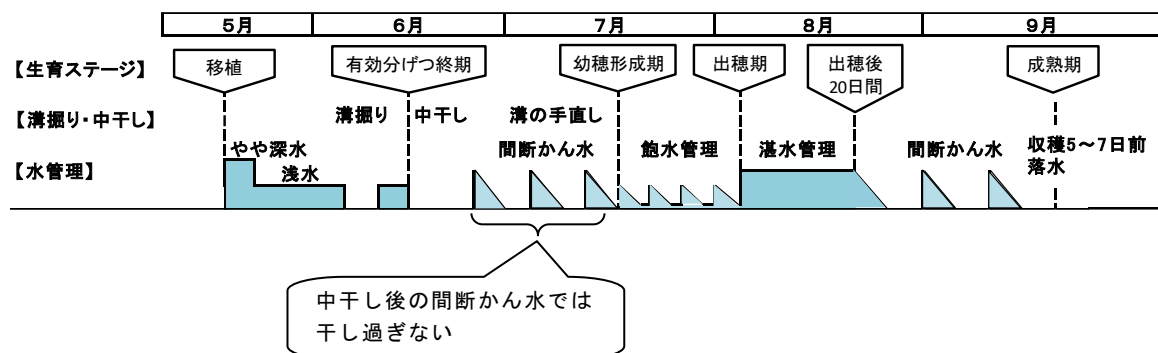
表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

<水管理のイメージ>



(2) その他の管理

- ・病害虫及び雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。
- ・残草がある場合は、草種に対応した液剤等を用い、除草剤が雑草に確実に付着するように丁寧に散布する。

[参考 富山地方気象台 2週間天気予報 (2025年6月24日17時更新)]

